7 月 13 日 メッセージ

聖書：使徒言行録 4 ： 32 － 37

「心も思いも一つ」

一方的に相手を断罪したり、相手の主張を一切聞かずに避難したりしてはならないのは当然のことでしょう。ところが、現実はこの繰り返しばかりです。「自分（たち）さえ良ければそれで十分ではないか」という主張は、いつも一定の支持を得ています。

「弱いよりも強い方が良いだろう」「貧しいよりも豊かな方が良いだろう」という声は、その背後に「そのためならば他者がどのようになってもかまわない」という思想を孕んでいます。いなくて良いはずの「敵」を作り出して、自分たちの結束を強めようとしています。

今、世界中の至る所で過激派が台頭し、ネオナチやネオファシストのグループが増え、移民や難民が非難されている現実があります。それは日本でも形を変えて起こっています。

しかし、神はこの世界を単一に創られたのではありません。神はこの世界を多様に創られました。一つひとつの存在がかけがえのないものとして造られたことを聖書は証ししています。そして、神はご自身が造られた全てのものを忘れることはないと約束してくださっています(「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも／わたしがあなたを忘れることは決してない。」イザヤ書 49:15)。

だとすれば、私たちが目指すべき世界は被造物同士で互いにいがみ合い、互いに排除し合う世界ではないはずです。多様な一人ひとりが互いに手を携えて、真の豊かさを求める世界であるはずでしょう(「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」詩編 133:1)。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」(マタイによる福音書 6:33)。イエスはこう言って、弟子たちが、そして私たちが神の正しさをこの世界に広めることを期待されました。また、「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」(マタイによる福音書 6:24)とも言われています。誰かが一方的に得をして、誰かの権利を踏みつける世界はやはり正しくないと言ってよいでしょう。

「心も思いも一つ」(使徒言行録 4:32)にすること。「言うは易く行うは難し」という言葉がそのまま当てはまる言葉だと言えます。私たちは何とかして「一つ」になろうとしますが、なかなか上手くいきません。普段からよく話しているはずの家族ですら、夕食のメニュー一つ、満足に一致することが少ないのと同じように、つい私たちは「自分」を先にしてしまうのです。

でも、だからこそ、私たちは諦めずに話し合い続ける必要があります。せっかく私たちには言葉が与えられているのですから、暴力ではなく話し合いで物事を解決する道を進みたいのです。

ただし、言葉は諸刃の剣でもあることもまた確かです。元国連ジェノサイド防止担当特別顧問のアダマ･ディエンは次のように言います。「ホロコーストはガス室から始まったのではなく、はるか以前にヘイトスピーチから始まったのです」と。また、「言葉は人を殺すことを、私たちは心に留めておかなければなりません」とも。けれども彼はその力を知っているからこそ、「言葉は平和のため、愛のため、私たちの世界の社会的一体性や調和を向上させるためのツールとして使わなければなりません」と続けるのです。

私たちには改めて、言葉の持つ力を信じて、平和を希求することが求められています。一朝一夕には解決しませんが、それでも何とかして「心も思いも一つ」にして、神の世界を、神の平和を実現するために働くことが期待されているのです。